

くらしの名器を生む窯。

細川氏の肥後入国と共に始まった。以来、同家の御用窯として栄えたが、明治維新後、藩の庇護が断たれると次第に衰え、一時は、ほとんどその跡をとどめないまでになった。

この小岱焼の、消えかけた火を再び起こしたのが、熊本陶芸界最長老の近重治太郎氏である。島根の陶工の次男に生まれ、十三歳の時からこの道ひと筋に生きてきた治太郎さん

現在、この健軍窯で焼かれているのは、皿、湯呑みなどの日用雑器と茶碗などの茶陶類。治太郎さんの息子さん、真さんを中心に、二人のお孫さんが、それぞれの個性を生かした製作に励んでいる。

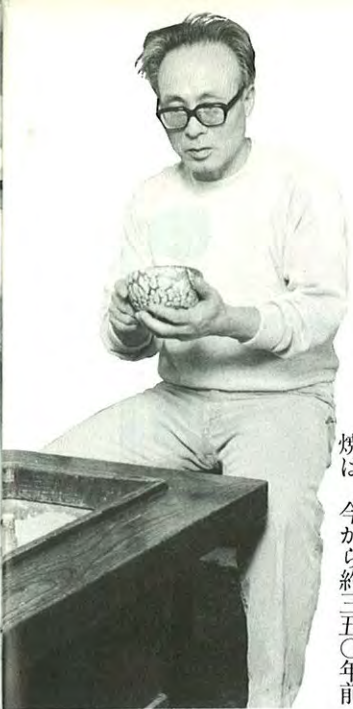
でもあるお茶の器をつくられる。四十歳を過ぎてから始めたという肥後古流の腕前も、師範格。「ろくろの技だけは、父にはたちうちできません」という真さんの言葉とおり、その手元からは、七十年の歴史を感じさせるすばらしい曲線がせり上ってくる。ろくろを並べて、黙々と土を見つめる親子三代の無言の切磋琢磨。

ピンと張りつめた仕事場には、こころよい緊張感が溢れていた。

熊本市健軍
近重 治太郎さん(89歳)
真さん(61歳)
真純さん(33歳)
真二さん(30歳)

落ち着いた赤褐色の地肌には、釉薬の白いなだれ模様。その素朴で、おらかな姿の焼物には、思わず、つくった人の手の温もりさえ感じてしまう不思議な魅力がある。

熊本を代表する焼物のひとつ小岱焼は、今から約三五〇年前



真さん



治太郎さん

これは、その腕を見込んだ肥後の数奇者たちの勧めで絶えていた小岱焼の復興を決意。昭和六年、現在の地に窯を開いた。長年の研究と努力の末、ようやく古法を習得。そして新しい趣向をこらした、いまの作風も確立した。



真二さん

日常の制作活動を、事実上次代に譲った治太郎さんだが、いまでもご本人の趣味



真純さん